論文の内容の要旨

論文題目　思春期問題としての不登校―自我体験に関する現象学的解明を手がかりとして―

氏　　名　加　藤　誠　之

我が国の不登校に関する先行研究は，①不登校を子どもたちの持つ個人的・内面的な病理又は生育史的な問題に帰す個人病理主義的な研究と，②不登校を学校又は社会の状況に求める社会病理主義的な研究に区別される。しかし，前者は今日に至るまで，不登校のはっきりした原因を見出せていない。他方，後者は，不登校を子どもたちの選択の結果と考え，この考えに合致しない子どもたちの声を等閑視してきた。それゆえ，貴戸理恵は，不登校という事象は不登校経験者によっていかに生きられてきたかをありのままにとらえようとする当事者主義的研究を提唱したのである。

ただし，貴戸は不登校という事象の意味を，不登校経験者へのインタビューによってとらえようとしている。このとき，不登校経験者は当該事象の事象の意味を，自らを対象とする認識作用すなわち反省作用によってとらえているはずである。しかし，生越達によれば，人間はハイデッガー，M.　の言う世界－内－存在としての自分の在り方を，認識作用に先立つ気分によって開示されている。それゆえ，人間は反省作用を遂行するときも，気分の影響を免れない。特に，不登校児童・生徒は気分の影響を強く受けており，反省作用によって自分の生を正しくとらえられるとは限らない。ただし，人間を或る気分に気分づけているのも世界－内－存在の作用である。それゆえ，我々は不登校児童・生徒の生を理解しようとするとき，彼らの反省作用によって得られた内省報告を手がかりとしつつも，反省作用に先立って彼らを気分づけている彼らの世界－内－存在の作用に遡ろうと試みなければならないのである。生越はこの試みによって，以下のことを明らかにした。すなわち，不登校児童・生徒は，学校を中心とする世界の内で世界によって脅かされ，世界を不気味で居心地の悪い世界として経験し，ハイデッガーの言う不安を覚えている。彼らはこの不安のゆえに，学校にいられなくなって家庭に退却するのである。ただし，生越は，「不登校児童・生徒はなぜ或る日突然，学校を中心とする世界を不気味で居心地の悪い世界として経験するのか」という問題を論じていない。本稿では，この問題を『存在と無―現象学的存在論の試み―』におけるサルトル，J.　P.　の現象学的哲学を導きの糸として考察する。

サルトルは即自存在すなわち事物の存在と，対自存在すなわち人間の意識の存在とを区別する。即自存在は無と関係を持たず，無によって基礎づけられる否定作用と関係を持たない完全な肯定性である。それゆえ，即自存在は，実在的な原因から実在的な結果を引き起こす肯定的な存在の系列としての因果的系列によって完全に拘束されている。他方，対自存在は無をもたらす作用（無化作用）を有し，無によって基礎づけられる否定作用を遂行し得る。それゆえ，対自存在は，肯定的な存在の系列である因果的系列から自分を外す能力としての自由を有する。また，対自存在は自らの否定作用によって，自分が即自存在の総体すなわち世界であることを否定し，世界に対して現前的＝現在的（présent）になる。更に，対自存在は自らの否定作用によって，過去の自分を既にそれであらぬ自分として否

定し，未来の自分を未だそれであらぬ自分として否定する。かくして，対自存在は，「自己（soi）」との一致を目指して過去の自分を逃れ，未来の自分に向けて現在の自分を超出し，自分を時間化していくのである。このことは，青年心理学で言う自我体験に際して定立的に意識される。サルトルによれば，私は世界の内にあるとき，「自己」との一致を果たす上で現在の自分に欠けている欠如分を自分によって実現されるべき可能性として見出し，この可能性の実現に向けて現在の自分を超出していく。私はこのとき，世界の内で出会われる事物を，当該可能性を実現するために利用される道具として見出す。この道具は私を帰趨中心として，他の道具を無限に指し示す道具複合を形成する。こうした無限の道具複合こそ，私にとっての世界である。また，私の意識は対自存在であるにもかかわらず，即自存在である身体と同一の存在を形成している。しかも，私の身体は，私にとって第一義的な道具である。それゆえ，私は世界の内にあるとき，自分の身体を無限の道具複合としての世界に挿入し，世界と一体化しつつ，世界の帰趨中心になっているのである。

しかし，思春期を迎えた子どもたちは，意識の無化作用によって①意識と身体との分離②反省的意識的＝時間的意識の成立③自分の存在の偶然性についての自覚を経験する。また，彼らはこの経験を基礎として④他者によって対象としてとらえられる対他的身体の成立⑤身体と切り離された理念的・一般的な他者の出現⑥理念的・一般的他者によって他有化された（aliéné）世界の出現及び⑦性的身体の出現を経験する。こうした一連の経験こそ自我体験である。彼らは，当該体験を契機として理念的・一般的な他者に出会うとき，当該他者によって帰趨中心としての地位を奪われ，当該他者を帰趨中心とする世界の内で，当該他者の可能性を実現するために利用される道具に失墜する。彼らはこのとき，今まで自分の可能性を実現するために利用される道具複合であった世界を理念的・一般的な他者によって他有化され，当該他者の可能性を実現するために利用される道具複合になったよそよそしい（aliéné）世界として見出す。彼らはこうして学校を中心とする世界でハイデッガーの言う不安を経験し，この不安によって自分の存在を脅かされ，学校を中心とする世界から退却して家庭に退避するのである。

しかし，彼らはこのとき，「自分は学校を休み続ければ社会的な不利益を被るのではないか」という懸念を覚える。それゆえ，彼らは，自分の存在を脅かされる辛さを耐えて学校に通うか，社会的な不利益を覚悟して学校を休むかを選択せざるを得なくなる。彼らはこのとき，社会的な不利益を避けるため，敢えて学校に通おうと決意するかも知れない。しかし，彼らは自由であり，因果的系列によって拘束されていない。それゆえ，彼らは学校に通おうと決意しても，この決意に従って学校に通えるとは限らないことを意識し，サルトルの言う不安を覚えるのである。ただし，不登校児童・生徒も一個の人間である以上，時として不安を耐えてでも何かを選択しなければならない。それゆえ，教育者は不登校児童・生徒とかかわる際，彼らはこの不安を覚えたときにどこまで持ちこたえられるかを見極めた上で，彼らを上記の状況に追い込んでよいか否か判断しなければならないのである。

ところで，不登校児童・生徒は自我体験を契機として，理念的・一般的な他者によって帰趨中心としての地位を奪われ，当該他者を帰趨中心とする世界の内で，当該他者の可能性を実現するために利用される道具に失墜する。彼らはこのとき，今まで自分の可能性を実現するために利用される道具複合であった世界を当該他者によって他有化され，この世界を当該他者の可能性を実現するために利用される道具複合になったよそよそしい世界と

して経験する。ただし，この世界は，任意の誰かの集合体すなわち「みんな」によって実現されるべき「みんな」の可能性で満たされている。それゆえ，私はこの世界の内にあるとき，「みんな」と共に「みんな」の可能性を追求し，この世界を「みんな」の可能性を実現するために「みんな」によって利用される道具複合として見出している。この道具複合は，私も「みんな」の一人である以上，私によって利用される道具複合でもある。それゆえ，不登校児童・生徒は「みんな」の中に自らを失い，「みんな」の一員として「みんな」と共に「みんな」の可能性を追求できるようになるとき，この世界を再び自分によって利用される道具複合すなわち自分の世界として見出す。彼らはこうして，自我体験を契機としてよそよそしくなった世界を，再び慣れ親しまれた自分の世界として取り戻すのである。ただし，私は世界の内で「みんな」の可能性を追求しているとき，世界の内で出会う他者を「みんな」の可能性を実現するために私によって利用される道具に失墜させていると共に，自らも「みんな」の可能性を実現するために他者によって利用される道具に失墜させられている。このことこそ，私と他者との間に成り立つ真の相互性である。私はこのとき，他者によって，道具としての役割に応じた一定の振舞いを忠実に遂行するよう要求されており，この要求に応じなければ厳しく非難される。それゆえ，私は他者の前で自分の自由を封印し，周囲の要求に従順に振る舞う「よい子」の在り方を選択する。先行研究でも，不登校児童・生徒はこうした「よい子」の在り方を生きていると指摘されている。

しかし，この在り方は自由を否定する在り方であり，無理を内包している。それゆえ彼らはこの在り方を乗り越えるため，時として「よい子」の在り方とは正反対の逸脱的な遊びを行う。サルトルによれば，遊びは人間の自由を顕示し現前させることを目指す特殊な型の企てである。それゆえ，遊びは「よい子」の在り方を選択する際に自分の奥底に埋葬した自由の意識を取り戻し，「よい子」の在り方を乗り越える上で必要なのである。特に，非行は本質上，自分の自由を顕示し現前させることを目的とする遊びである。それゆえ，不登校児童・生徒は，軽微な非行のあるヤンチャな生徒とのかかわりの中で逸脱的な遊びを遂行し，自分の自由を回復していくのである。本稿では以上のことを，①筆者が 1990 年代に見学した「適応指導教室」の実践，②筆者が 2000 年代に自ら法務教官として勤務した少年院での実践，③ 2009 年に現任校に赴任した後に見学した私立高校の実践を事例として明らかにする。（3,992 字）